



福島県

宮原喜美子さん(谷津田)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原

取材日：10月7日

“自分を耕して、自分に種をまく”をモットーに ～ビーズアートジャパン大賞2013 佳作受賞～



▲手作りのビーズコレクションと一緒

佳作受賞作品▶
(ブレスレット)



現在、相馬市の大野台仮設住宅でご主人とお母様の3人でお住いの宮原さん。仕事をしながら震災後に取得された資格を生かし、ジュエリークリエイターとして常に前向きなチャレンジャーです。たくさんの方にお世話になったことをいつも心におき、感謝の気持ちで明るく暮らしていらっしゃいます。

震災当日は、町内の現場で泉田組の仕事をしていた。すぐに帰るように言われダンプを運転して戻ると途中で陥没している道路を見つけた。これは危ないと思い、カラーコーンやバリケードを配置し、橋の段差を知らせる誘導を暗くなるまでしました。誰も事故に遭わずに済んで良かったとほっとしています。それから家に戻りましたが家の中はひどい状態だったので、夜は夫と母と車で過

しました。翌日、津島に避難し、3日後東和住民センターに移動して20日間いました。東和の人はみんな暖かくて、自分の布団が無くなるのではと思うほど運んでくれたり、薪ポイラーを持ってきてくれたりと親切で大変感謝しています。その後、裏磐梯で4カ月暮らしました。その時一緒だった10家族とは本当の家族のように過ごし、今でも交流しています。

浪江では趣味でビーズを作っていたので、材料を買うために会津の手芸店へ行った時、榎葉町から避難されていたビーズの先生に、資格を取らせてあげてからやりなさいと応援されました。ピンチはチャンスだ、今までできなかったことが出来るかと折れそうな心を切り替え、震災の年の7月にジュエリークロスシユの技能認定をいただきました。また、昨年10月には針と糸で編むビーズアートステッチの資格も取りました。そのおかげで、親切にしていた東和の皆さんに私にできる恩返しという事でビーズ作りを教える事も出来ました。

そして今回、プロの方が出展するビーズアートジャパン大賞

に応募した理由は、桂由美さんをはじめとする有名な先生の目に触れるだけでいい、仕事をしながらでもチャレンジできるのだとわかってもらいたいと思ったからです。作品は、「ハーモニー(女神様のお気に入り)」という題名でネックレス、ブレスレット、イヤリングの3点セットです。250名の応募作品から選んでいただき佳作に選ばれました。福島からは一人の応募でした。

“自分を耕して自分に種をまく”と思つてずっとやってきたが、その芽が出てきたのかなと思つています。今はその種をみんなに分けているところで、みんなが喜ぶ顔が嬉しいです。

また、1年前からオカリナを月に2回習っています。楽譜もなかなか読めないのですが、みんなを明るい気持ちに引っ張ってくれる先生の姿勢を学びたくて始めました。

今、ビーズは人をつなぐ役割ですが、将来販売や教室で教える事が出来ればいいと思つています。大変だったことを思つているのではなく、それぞれの状況の中で沢山の出会いに感謝しています。いい人と巡り合え



浪江のこころ通信

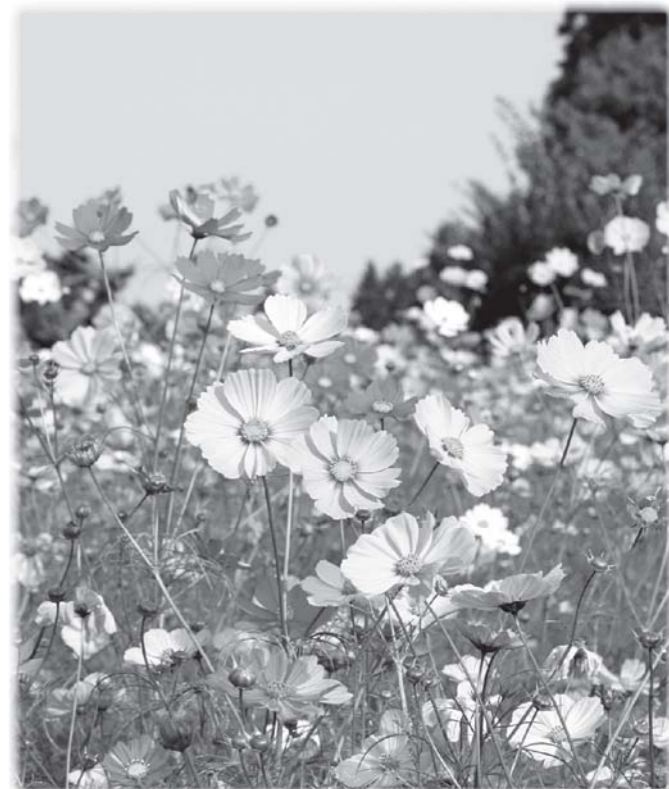
・第29号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。



再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第29号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218



田中 裕樹さん・純子さん(樋渡)

取材者：京都府駐在浪江町復興支援員 富川・土田
取材日：10月11日

生まれ育った関西よりも 浪江町は、大切なふるさとです

現在、田中裕樹さんは奥様の純子さん、次男の慎也さん、長女的美穂さんと家族4人で大阪府豊中市の市営住宅で生活していらっしゃいます。同じ棟には長男の貴雅さんも別にお住まいになり、家族5人仲良く生活されています。この秋から裕樹さんは放射線管理のお仕事で福島市に単身赴任することになっており、しばらくは純子さんが福島市と豊中市を行ったり来たりの生活になるということです。



▲田中裕樹さん・純子さんご夫妻

■震災後、実家のある兵庫県伊丹市へ、そして豊中市へ
(裕樹さんのお話)
震災当日、妻は仙台におり、ものすごい揺れにびっくりして、混乱する仙台市内から吹雪の中、長町警察署に避難することができました。私は妻と連絡が取れなかったので、娘と車で迎えに仙台へ。とりあえず3人で一度自宅に戻り、たまたま息子達も浪江にいたので、そのまますぐに津島に向かいそこで3日間過ごしました。それから新潟を経由して私達の出身地である兵庫県伊丹市に入りました。実家の両親や親戚の人たちも家族5人全員が無事に帰って来たことに、涙を流して喜んでくれました。しかし

■優しい浪江の言葉を覚えるのが嬉しかった
(純子さんのお話)
震災の半年前に新しいアパートに引越したばかりで、家具や電化製品も全て新しく買い揃えていました。一時帰宅したのも、新築のアパートだったので被害はほとんどなく、ある程度片付けもしてきたので、そこに住めないことが本当に残念です。浪江には、17年間住んでいたのでも、子供達もすっかり浪江に馴染んでおり、私は優しい浪江の言葉を少しずつ覚えていくのが嬉しく、このまま浪江の人にならな

るとも淋しいです。今、こちらにいても関西出身なのにどんな関西弁を話していたかも忘れていきます。それに浪江は気候も良く、周りの人たちも優しく、本当に住みやすい町でした。
主人は、震災前から放射線管理の仕事をしており、この秋から福島市を拠点に仕事をするため福島市に単身赴任します。私はそのための生活用品を準備したり、生活が落ち着くまでは、福島市と豊中市を行ったり来たりするようにしたいと思います。でもこちらは地元なので、友人のお付き合いも大切にしながら、自分なりに楽しんで生活していきたいです。
子供達は、すっかり関西での生活に順応しているのですが、今後もしもこちらに住むことになるかもしれないですが、やはり将来的には不安もあります。ただ、浪江にいた時はほとんど実家には帰っていませんでしたので、これを機にお互いの実家へ帰ることも増えると思いますので、今までの分もこれから親孝行をしていきたいと思っています。



村上 卓さん(田尻)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：10月8日

田畑を耕したい ～恵み多き浪江に戻れるように～

村上さんご夫妻は、定年退職後、有機農業に取り組みながら落ち着いた生活ができる土地を望み、横浜市から浪江町に移り住み、穏やかな生活を送っておられました。震災後は、ご友人の心遣いで山形県天童市の住宅を借りることができ、現在ご夫婦お2人で暮らしています。



▲天童市のお住まいにて。
卓さん、喜代子さんと一緒に

地震発生時、私は棚塩のパークゴルフ場でパークゴルフをしており、家を離れていました。揺れがひどく立っていられたせいで、溝の水も跳ねるほどで、「この揺れではもう自分の家も倒れる」と思ったくらいです。町内は塀が倒れ家も崩れ、通る道路は地割れしており、迂回して自宅にやっと帰ることができました。まさか町から避難することになるとは思わず、翌早朝、瓦屋に屋根の修理を頼みに行き、すぐ避難指示を知りました。電気

が通っていないので、放送も鳴らず、自宅前の渋滞をみて驚きました。その後、津島から私の地元・横浜市に避難しました。もう都会に住むことは考えていないことを仕事時代の友人に話したところ、「山形県天童市に持っている家が空き家だから」と貸してくれ、2年前の4月から天童市で暮らしています。やはりこちらに来て初めは、知り合いがなくて寂しかったのですが、友人達がさくらんぼ狩りに来たり、岳温泉で忘年会をしたりして集まることができました。雪の積もらなかった横浜や浪江とは違い、毎日雪かき、家の雪下ろしの心配など大変なことも多いですが、田んぼや畑もあり街よりも落ち着いて暮らしています。
8年ほど前、自給自足の有機農業をする穏やかな生活を求めて、夫婦2人で横浜市から浪江町に移住しました。田植え機、耕運機、稲刈り機などの農機具も揃え、手がかかって大変でも、楽しみながら安心して食べられる農作物を育てる生活をしたかったのです。浪江には孫達も休みの度に遊びにきて、釣りや陶芸

などを楽しんでいて、恵まれてる場所だと思いました。
自給のできる農業ができるようになるまでは、色々な方に大変お世話になりました。何もかも初めてで夕方遅くまで作業する私たちをみかねて、近所の方が手伝ってくださったり、地区の牛農家の方に糞と堆肥を交換してもらったりと、本当にいろいろ助けていただいたことを思い出します。米、みそ、梅干し、干し柿など全部手作り。米も、土を作るところから、稲刈り、はせがけ、脱穀まで行ない、全部自分たちで手をかけて育てました。育った作物は親戚や知り合いに譲り、野菜も大きく育つようになり、やっとなり取りよく仕事ができるようになってきた矢先の震災でした。
戻れるものなら戻って、また土地を耕したいという想いはなかなか消えません。住まうだけでなく、田畑も耕せるような恵まれた浪江の土地に、元気なうちに戻れたら何より嬉しいことだと思っています。



鈴木 静子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：10月9日

天から与えられたこの命、 天寿を全うしたいですね

『浪江のこころ通信』第1号掲載の鈴木静子さんは、当時(2011年6月)岳温泉の東三番館に避難されていましたが、現在は二本松市郭内の仮設住宅に孫娘さんと暮らしています。「1年、2年半と経ちましたが、状況が変わらない今、先を照らす光が見つけれない」とおっしゃいます。



▲「今日はたくさん話してすっきりしたわ」とおっしゃってくださった鈴木静子さん

■浪江への思いが、”行きつ戻りつする”毎日です
避難準備区域になった自宅の屋根を修理した後、なぜか放射線量が上がっているのですよ。このような状態で町に帰ることができないのだろうか、一向に収まらない原子力発電所の汚染水漏れは一体いつまで続くのだろうか、毎日逡巡しています。前回取材して頂いた時には、希望に溢れた言葉やふるさと浪江に対する思いを伝えたいような気がしますが、今は、浪江に帰る時期などはっきりとした目的がなく、生きるの辛いと思う時があります。また、50坪ほどの家の片付けを独りで出来るかしらとか、近所の人は帰ってくるのだろうか、10年後は心配せず

に住めるのだろうかとか、様々な思いが行ったり来たりしています。新しい一歩を踏み出され、仮設を出て行く方もおられて、櫛の歯が抜けるようになっており、何だか取り残されるよう不安です。
町には帰れる目途を示して欲しいですが、原発があのような状態でしょう、本当に安全性は確保されるのでしょうか。除染が済んでやっと思えるようになって、1、2年後に再び事故など起きたらどうでしょう、などと思ってしまうのです。
■何かすることで、明日につながる町
町の社会福祉協議会やまちづくりNPOの会議など、お声がかかれ断らずに出かけています。
私は若い頃から剣舞を習っており、そのために始めた詩吟も、浪江から避難してきた方々と再び習い始めました。
先日、県文化センターで中島潔の絵を観て久しぶりに感動しました。何かに感動する気持ちも失っていたのだと、その時気が付きましたよ。
それから、長年取り組んできた「天蚕*」を育て、広める活動も続けています。今年、仮設

の片隅で育てた繭は50個採れました。天蚕を育てたいという方がおられますので、霊山の天蚕の会さんとの交流を通じて、これまでの経験などをお伝えしたいと思っています。
*日本原産の大型野生蚕の一種。クヌギ、コナラ、エゾノキヌヤナギなどの葉を食べて成長し、孵化後、50、60日くらいで繭を作ります。萌木色の美しい絹糸は「繊維のダイヤモンド」と呼ばれ品質も高く、希少価値があるとされています。
■孫の成長が一番の楽しみであり、希望です
仙台の大学に進学した孫娘が、週末に帰ってきます。孫は私を元気づけるためにカラオケに誘ってくれて一緒に楽しんだりしています。悩みなども聞いてもらい、助けられています。幼い頃からみると本当に成長したと思います。私は看護師をしていましたが、定年退職後も訪問看護師として働いていました。3月11日は夫の四十九日で、公休を取り、夫の納骨を済ませて直ぐ後にあの震災でした。浪江ではこの時期、休日にはキノコ採りや天蚕の飼育を楽しんでいたのに、原発事故のために人生の貴重な時間を取られたような怒りや恨みなどもありませんが、人生、無駄な経験はないと信じて前向きに進みたいと思っています。



萩野 虎夫さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：10月7日

帰れるようになったけれども、 未だ住めないふるさとを思う

福島市北部、伊達市や伊達郡との境に近い宮代応急仮設住宅に2011年8月に入居し、初代の自治会長に就任されましたが体調を崩され、会長職を交代されました。その後、再び会長に就任され、「宮代では引きこもりは一人もいません。互いを気遣う仕組みが自然に定着したのです」と、自治会の2年半以上に及ぶ素晴らしい成果を話してくださいました。



▲静かに微笑む萩野さん

■二度とはないような出来事。鮮明に覚えています
大震災当時、私は役場の嘱託を務めており、上ノ原の町営住宅の駐車場地震に遭いました。隣家が今にもつぶれそうな大きな揺れで、普通に歩くことはできませんでした。一旦帰宅しようとしたのですが、途中の道は地割れだらけでした。家は、ぐし(瓦屋根)が半分大破し、妻はあまりのことに廊下に座り込んでいました。無事を確認し、直ぐに役場に戻ると、津波から避難して来た請戸の方々の対応に追われました。
翌12日早朝5時頃に避難を呼びかける町の放送を聞き、前の

義妹には1週間ほど世話になり、前の家の家族は会津へ、私と妻は仙台の娘の家に避難しました。その間に体調を崩して病院へ行ったところ、脳溢血の一步手前でした。その後、松原湖のペンションに1カ月おりましたが、身体がどうにかなりそうだったことと、町の情報が入り難いことがあり、8月に完成したこの宮代に直ぐに入居することを決めました。
■支援して頂ける有り難さをつくづく感じています
宮代には、継続して支援活動をしてくださる団体が4、5団体あり、特にカリタスジャパン

さんや北信カルバリー教会さんには大変お世話になってます。この近所の福島市北信グラウンドゴルフ愛好会さんからはいつもお誘いを頂き、皆、地元の方と楽しい時間を過ごしているようです。反面、仮設住宅に住む方々は大半が60歳を超えており、体育祭のイベントにお誘い頂いても、参加が難しい状態で申し訳なく思っています。
■浪江に行くのはよそうか、と迷うことがあります
浪江町の自宅には帰れるようになりませんが、住むことはできません。何もかも震災当時のままの町はゴーストタウンになってしまい、帰っても誰にも会えません。
国や県の対応が遅すぎて、町民が自ら動くしかない状態になっているようです。宮代でも自分の生活再建のために住まいを移す方もいます。近隣の自治会長さんとも話していますが、町には福島市に復興住宅を作ってくださいるようにお願いしたいものです。